



## 優良賞

### おとうの決意

野田村立野田中学校 3年  
山口大貴（やまぐち たいき）

「村の人が待っている、俺はもう一度店をやる。」  
今年の3月5日、おとう・私の父は食堂を再開しました。プレハブの仮店舗、元の場所ではないけれど、のれんは前と同じもの、店の中にはこだわりの水槽を置き、十府ヶ浦食堂の再開です。両親が笑顔でお客さんを迎える姿を、私は一生忘れません。

「思いやりのある人になれ」「感謝の気持ちを忘れるな」「人よりも努力しろ」

小さい頃からおとうに言われてきた言葉。この1年ほど、この言葉が身にしみたことはありません。

あの日、平成23年3月11日、長年家族が暮らしてきた家を、3日後に引っ越すはずだった新しい家を、そして祖父から引き継ぎおとうが守ってきた食堂を、私たち家族は失いました。

全てを一瞬で失う。こんな経験をしたら、人はどう生きていけばいいのでしょうか？

おそらく多くの人が嘆き悲しみ、絶望感に襲われ、前向きになどなれないでしょう。

しかし、おとうは違いました。震災直後こそ、目の前の現実に愕然としていましたが、その後の行動は凄まじいものでした。

まず、友人を頼り当座の生活場を確保、食堂跡地のガレキ処理、新たな場所への引っ越し、そしてハローワークでの職探し。たった1ヶ月の間に、こんなに多くのことに立ち向かったおとう。

そんなある晩、

「俺はもう一度店をやる。」

おとうの強い決意表明でした。

「これからかかる教育費や家の借金とか、どうしていくの？新しい店って、タダではできないよ。」

先々を心配する母。しかし、おとうは頑として曲げません。

「村の人が待っているんだ。俺はその思いに応えたい。」

その決意を聞いた時、不思議とこれからの生活に不安を感じませんでした。頑固なおとうのことだ、きっとやり抜くはずだ。

「店、またやるんだよね？」

「あのラーメンがもう一度食べたいなあ。」

「食堂の再開はいつ？」

避難所・えぼし荘で働き始めたおとうに、村の人や常連だったお客さんが何度も声をかけるのを、私は聞いていました。こうした村の人たちの温かい声が、おとうの力になったのです。

「思いやりのある人になれ」「感謝の気持ちを忘れるな」「人よりも努力しろ」

小さな頃から言われてきた、おとうの教え。震災という人生最大のピンチにも負けず、食堂再建に向け、今も頑張っているおとうを、私は尊敬しています。

最近、悲しい出来事が数多く報道されています。小中高性のいじめ問題、我が子への虐待、高齢者の孤独死。その原因の一つは、無関心、人と人とのつながりが希薄ということではないのでしょうか。関わりを持たない社会は、多くの悲劇を生みだします。もしかしたら、わが家でも同じようなことが起こっていたのかもしれないのです。

全てを失ったとき、力になること。それは目に見えているのでしょうか？

人と人とが互いに思いやり、理解し合い、励まし、支え合うことなのではないのでしょうか。

おとうの店、その名も十府ヶ浦食堂。身内が言うのもなんですが、新鮮な海の幸を使った料理は、お客さんにとっても好評です。一度食べに来て下さい。